

日本におけるコメニウス研究の成果と課題

井ノ口 淳 三

On the Development of Comenius Research in Japan

Junzo INOKUCHI

Abstract

The purpose of this paper is to consider about the main subject of Comenius research in Japan. In order to show the theme we have to examine the history of Comenius research. First of all, we have to inquire into the question of the division. The period falls into four parts: 1. the years before 1957; 2. 1957 - 1969; 3. 1970 - 1991; 4. from 1992 to the present. The same may be said of Czechoslovak Comenius research. After pointing out that the period of those since the war falls into three parts, Marta Bečková continues: "The great international conferences held in honour of important anniversaries of Comenius were not mere formal landmarks, but were significant moment of qualitative re-assessment." (Marta Bečková: On the Development of Comenius Research in Czechoslovakia since the War, in Symposium Comenianum 1982, Uherský Brod, 1984). The purpose of this quotation is to show that the importance of the third centenary of the Amsterdam edition of the Opera didactica omnia (1957), the third centenary of the death of Comenius (1970) and the fourth centenary of the birth of Comenius (1992).

Having made this point of the division, we may go on to discuss about the characteristic features. There were only eight monographs before the war in Japan. During the first period the most active scholar was Satoru UMENE. He collected many books about Comenius and popularized. Comenius research in Japan was started from the study of Didactica magna by educationalists.

During the second period Didactica magna was first translated into Japanese

from Latin original by Syuyu SUZUKI 1962. And Kyoji ETOH also translated the book of Robert Alt: *Der fortschrittliche Charakter der Pädagogik des Comenius* into Japanese 1959. Both of them referred to the importance of the pansophical thought of Comenius in the early sixties.

In the beginning of the third period Mamoru HORICHI published “Comenius Kenkyu (The Study of Comenius)” 1970. His concern was to consider about the correlation between the pansophical thought and the didactical thought of Comenius. During the third period 172 monographs were published. Teruo FUJITA translated *Informatorium maternum* into Japanese 1986, and Junzo INOKUCHI translated *Orbis pictus* 1988 also. In this period the various works of Comenius were studied. For example Teruo FUJITA studied on *De sermonis Latini studio didactica dissertatio*, Masaaki KIJIMA wrote on *Listové do nebe*, *Centrum securitatis* and *Unum necessarium*. Koichi OHTA stated on *Panegersia*, *Panau-gia*, *Pansophia* and *Via lucis*. Reiko SATO remarked on *Pampaedia*. Moreover Yosimasa YOSHIOKA wrote on the theological aspect, Yukio FUJIWARA studied on the moral education, Miyako AKIHA on the infant education, Tsutomu TAKAHASHI on the audio-visual education etc... These studies prepared to the next stage of development, the fourth centenary of the birth of Comenius 1992.

In 1991 *Japanese Journal of Comenius* was started. This is the annual report of the Japanese association for the study of Comenius. And Teruo FUJITA edited “Comenius no kyoiku shiso (The educational thoughts of Comenius)” 1992. He had translated many works of Comenius into Japanese. But these translations are still in manuscript. Because Japanese publishing companies don't publish them.

These results lead to the conclusion that Comenius research in Japan is done by educationalists. And many works of Comenius were translated. Then we have to start to study on *De rerum humanarum emendatione consultatio catholica* by team, and to publish the paper not only in Japanese but also in foreign languages. We hope for the younger generation, namely Shin'ichi SOHMA, Eliza UNTEN-SAKUMA, Hiroshi OHKAWA, and others.

When we reflect on Comenius research, the war prevented the development. Therefore we have to act for the peace of the world as Comenius.

Key words : J. A. Comenius, *Didactica magna*, educationalist

1. 国際的動向と発展段階の時期区分

世界におけるコメニウス（Comenius, チェコ語名 Jan Amos Komenský 1592～1670）研究の中心であるチェコ共和国科学アカデミー哲学研究所は、首都プラハの旧市街広場から徒歩で5分ほどのベツレヘム礼拝堂のそばにある。旧市街広場は、1621年6月に27人のプロテスタントの指導者が処刑された所であり、それを偲んで今日もなお27の白い十字架が石畳の上に示されている。また、ベツレヘム礼拝堂は、1402年から1413年にかけて、ヤン・フス（Jan Hus 1371～1415）が説教を行い、宗教改革を訴える彼の主張が多く支持者を得た場所として知られている。つまり、いずれも歴史的に見てコメニウスにゆかりのある場所と言えよう。

その哲学研究所内には三つのコメニウス研究室があり、そこで8人の研究者がコメニウス全集の編纂や学会誌『コメニウス誌（*Acta Comeniana*）』の編集に携わっている。そしてコメニウス関係の文献は2階の最も奥に位置する部屋に配置されている。そこへ至る廊下の両側には古代ギリシャ、ローマ以来の哲学者や思想家の肖像が掲げられており、もちろんコメニウスの肖像も容易に見出すことができる。コメニウスと斜めに向かい合う位置にピエール・ベール（Pierre Bayle 1647～1706）の肖像があり、彼らは今なお対峙しているという印象を与える。ピエール・ベールは膨大な『歴史批評辞典』を著したが、コメニウスの項目では彼の性格的な面も含めて酷評した¹⁾。そのせいばかりでもないだろうが、フランスではその後現在に至るまでコメニウスに関する研究文献はきわめて少ない。

出版物の点数と内容、研究者の層の厚さなどから判断すると、過去においても今日においてもコメニウス研究の盛んな国はチェコとドイツである。この二つの国からは相当の隔たりがあるけれども、現在その次に位置するのはイギリス、そして日本ではないだろうか。コメニウス研究に関する論文集を毎年定期的に刊行しているのは、チェコとドイツおよび日本の3カ国だけであり、最近カナダでも隔年に発行されるようになった。もちろんスウェーデンやポーランドなど、かつてコメニウスが滞在した国においても継続的な研究が行われているのであるが、ハンガリー、オランダなどでは関心がやや衰退する傾向にある。さらにスロヴァキアでさえチェコと分離独立した1993年以降においては、チェコで行われるコメニウス研究の国際会議への参加者も激減しているのである。

このような国際的動向の中であって、日本におけるコメニウス研究が、これまでいかなる成果を生み出してきたのかをふりかえてみることは、今後の課題を明らかにする上で重要な作業である。そこで本稿では、これまで諸外国の文献に紹介された日本の動向をも視野に入れてその傾向と特徴を指摘する。まず最初に、発展段階の時期区分を提示しよう。

世界のコメニウス研究の歴史をふりかえてみると、コメニウスの生涯の重要な転換点や主要な著作の出版にかかわりのある年の前後の時期に関係文献の出版点数が急激に増大し、研究が飛

躍的に発展してきたという傾向がある。その最初の事例は、生誕 300 年にあたる 1892 年である。コメニウスの没後は、『開かれた言語の扉』(Janua lingvarum reserata, 1629～31 年執筆, 1631 年出版, 以下『言語の扉』と表記する)や『世界図絵』(Orbis sensualium pictus, 1653～54 年執筆, 1658 年出版)などの代表的な教科書を別にすれば、コメニウス自身の著作の刊行はきわめて限られたものであった。ましてその研究文献の出版までには至らなかったのである。しかし、19 世紀に入るとチェコ民族の覚醒を呼びかける動きが歴史家や言語学者の間で強まり、この流れの中でコメニウスの評価も高まったのである。そしてドイツでも 1871 年以降にはコメニウス没後 200 年を契機にして次々に論文が発表され、1892 年の「コメニウス協会 (Comenius-Gesellschaft)」の設立に至るのである²⁾。

チェコでは 1897 年に『コメンスキー著作集』(Spisy Jana Amosa Komenského)の出版が開始され、1902 年までに全 6 巻が刊行された。1910 年には『コメンスキー総著作集』(Veškeré Spisy Jana Amosa Komenského)の出版も始まった。当初の計画では、コメニウスの著作を哲学、教育学、宗教理論、文学、詩、歴史、政治、書簡の八つの柱に分類し、全 30 巻として刊行するというものであった。これは 1915 年までは毎年 1 冊ずつ計画通りに刊行されたが、その後は第 1 次世界大戦の影響もあって 1926 年と 29 年にそれぞれ 1 冊ずつが刊行されただけで終結を余儀なくされ、今日あわせて 8 巻のみが残されている。またこの 1910 年には Jan Kvačala が中心となり、コメニウス研究の冊子が創刊された。この *Archiv pro bádání o životě a spisech J. A. Komenského* (ヤン・アモス・コメンスキーの生涯と著作についての研究のための記録)は、『コメンスキー総著作集』を普及するために発行された雑誌であり、その後 1940 年まで不定期にはあるが、15 号まで刊行された。最初の全 6 巻の『著作集』はブラハで出版されたが、『総著作集』も研究誌もその刊行地はモラヴィアの中心地ブルノであった。第 2 次世界大戦を挟んだ長い中断の後、装いも新たに *Acta Comeniana* の名前を冠して研究誌が復刊されたのは、コメニウスの『教授学著作全集』(*Opera didactica omnia*)刊行後 300 年にあたる 1957 年のことである。この時通算第 16 号として発行されたのは、*Archiv pro bádání o životě a spisech J. A. Komenského* の継承が意図されていたからにほかならない³⁾。

この 1957 年と没後 300 年の 1970 年、および生誕 400 年にあたる 1992 年がコメニウス研究史においてきわめて重要な節目の年となっている。チェコではこれらの年に大規模な国際会議が開催され、コメニウスの肖像をデザインした切手も発行されるなど、国をあげての記念の年とされた。1993 年発行の第 10 号以来 *Acta Comeniana* の編集長を務める科学アカデミーのマルタ・ベチュコヴァー (Marta Bečková) は、戦後のチェコスロヴァキアにおけるコメニウス研究の展開についてまとめた論文の中で、第 1 期を 1945 年～1956 年、第 2 期を 1957 年～1970 年、そして 1971 年以降執筆時点までを第 3 期と時期区分していたが⁴⁾、日本においても同様にこれらの年を境にして区分することができるのである。つまり、日本におけるコメニウス研究は、1957 年以前を前史的な第 1 期とすれば、第 2 期はその後 1960 年代後半までを含む時期であり、第 3

期を1970年から1991年まで、そして第4期を1992年以降と区分することができる。以下それぞれの時期の特徴について考察する。

2. 1957年以前の前史的段階

日本におけるコメニウス関係文献の嚆矢は、1882（明治15）年の「コメニアス史略伝」『千葉教育会雑誌』第8号～第10号（立真社）であるが、単行本としては、真田幸憲『近世教育の母コメニウス』（1904年、金港堂）が最初である⁵⁾。そして1924年には、『大教授学』（Didactica magna, 1633～38年執筆、1657年出版）の抄訳が『聖の世界と教育』（目黒書店）と題して辻幸三郎によって行われた。これらを含めて戦前にはわずかに8編が発表されただけであった。戦前の文部省教員検定試験（文検）においてもすでにコメニウスに関する出題がしばしば行われており、教育界に彼の名は知られていた。しかし、受験者はコメニウスの主張を教育史の概説書や受験参考書によって言わば間接的に学び試験に臨んでいたのであった⁶⁾。

数少ない戦前の出版物の中で一つの水準を示している著作は、『コメニウス』（1939年、岩波書店）である。著者の名前は佐佐木秀一と記されているが、この著作の大部分を実際に執筆したのは、梅根悟である。梅根はそれ以前にも論文「コメニウスにおける自然概念及び合自然原理」（『教育学術界』第6号～第12号、モナス社、1933年）を発表していたし、戦後も『コメニウス』（牧書店、1956年）を刊行しているように、第1期を代表する研究者である。コメニウスを日本の教育界に紹介した彼の功績はきわめて大きいものがある。彼が研究のために蒐集したコメニウスの著作は、「コメニウス文庫」として東京教育大学に寄贈されたが、それは現在筑波大学中央図書館に移管され、広く一般の利用に供されている⁷⁾。

この第1期の特徴は、コメニウスの著作の中でもっぱら『大教授学』を中心にして研究がすすめられていることである。それはこの時期に発表された論文の表題にも如実に示されている。たとえば、山極真衛「コメニウスの教授原理—『大教授学』を中心として」（1942）、上野辰美「コメニウスの教育思想—『大教授学』を中心として」（1950）、荘司雅子「宗教的感覚的實在論—コメニウス『大教授学』の意図」（1953）、鈴木秀勇「J. A. コメニウス『大教授学』の志向」（1954）などを挙げることができる。そして、ついに1956年には稲富栄次郎によって『大教授学』の翻訳がなされた（玉川大学出版部）。これはキーティング（M. W. Keatinge）の英語訳からの重訳とはいえ、コメニウスの著作の最初の全文訳であり、研究者のみならず広く教育界にコメニウスの主張が理解されることに寄与した。

このように日本におけるコメニウス研究は、まず『大教授学』を中心にしてその教育論に対する関心から始められた。そしてこの初期の受容の傾向は、今日に至るまでの我が国のコメニウス理解に一つの方向づけをする結果となったのである。

3. 1957年から1969年まで

『教授学著作全集』刊行後300年にあたる1957年を期して、日本でも広島大学においてそれを記念する催しが行われ、共同研究をまとめた著作が出版された。この催しの内容については *Acta Comeniana* においてもくりかえし紹介されている⁸⁾。この時中心となったのは、当時日本教育学会の会長をしていた長田新である。ペスタロッツィ (Johann Heinrich Pestalozzi 1746～1827) の研究者として著名な長田は、この頃日本教育学会の『教育学研究』や *Acta Comeniana* にコメニウスに関する論文を発表し⁹⁾、また『国際理解の教育-コメニウス三百年記念祭を迎えて』(育英書店、1959年)の編集にも携わっていた。この著作はコメニウス研究を主題とした日本で最初の共同研究の著作として記念碑的な意義を持つものである。

またこの頃若手研究者の間でコメニウス研究に関する全国的なネットワークを作ろうとする気運が高まっていた。その一つの動きは、「日本コメニウス学会」に結実した¹⁰⁾。そこには梅根悟、鈴木秀勇、村井実、江藤恭二、吉本均、石井正司らの名前が見られ、事務局長は堀内守であった。

上記のメンバーの中で、江藤恭二、吉本均、石井正司らは、早くから当時の東ドイツの教育学に注目し関心を寄せていた。そして、ローベルト・アルト (Robert Alt) が1954年に出版した“Der fortschrittliche Charakter der Pädagogik des Comenius”を共同で翻訳し、『コメニウスの教育学』(明治図書、1959年)と題して発表した。この著作はコメニウス研究に関する単行本の翻訳としては今日に至るまでも唯一の貴重なものである。

この第2期において江藤の活躍はめざましいものがあった。1957年から1969年の間に発表されたコメニウス関係の文献およそ60編の執筆者を多い順に挙げると、梅根悟11編、鈴木秀勇10編、江藤恭二8編であり、この3人だけで全体の半数を占めている。当時30歳代の前半であった江藤が、梅根や鈴木と肩を並べて次々に論文を発表していたところにも彼の充実ぶりがうかがえるのである。江藤の研究で注目されるのは、コメニウスの汎知学思想についての論文がすでに1961年に発表されていることである(『名古屋大学教育学部紀要』第8号)。つまり、それは『大教授学』のみに依拠したコメニウス研究の時代ではなくなったことを意味している。彼は、大学紀要に発表した一連の論文を『西洋教育史叙説-近代教育思想の形成』(福村出版、1967年)に集大成したが、同書の内容はコメニウス研究が中心である。

ところで、この第2期に発表された梅根悟の文献の多くはエッセイ風のものであり、論文の数と内容、および引用のされ方などから判断すると、事実上の第一人者の位置に立ったのは鈴木秀勇である。彼が1961年に発表した論文「コメニウス教授学の方法—その社会史的規定のために—」(一橋大学研究年報『社会学研究』第3号、勁草書房)は、大学の紀要とはいえちょうど200ページにおよぶ長編であり、優に1冊の書物に匹敵するボリュームを備えたものである。そして肝心の内容も、「コメニウスの諸教授方法ではなく、教授学の方法を問題に」したもので、

ラテン語とチェコ語の原典に基づく緻密な考察は、まさに「労作」の名にふさわしく、これこそ日本のコメニウス研究を国際的な水準に引き上げた画期的なものであり、40年近い歳月を経た今日読み返してみてもなおその輝きを失っていない。鈴木の提起した「生産力視点」、つまりコメニウスの「方法が実は時代の物質的生産力の進歩とそれを齎らす生産技術のメカニズムとへの着目によって導かれている」という指摘は、その後の研究に大きな影響を与えたのである。

鈴木功績は、そればかりではない。むしろ一般には『大教授学』の翻訳（明治図書、1962年）およびその普及（鈴木琇雄『コメニウス「大教授学」入門』上下、明治図書、1982年）の面で知られている。『大教授学』の翻訳は、すでに紹介したように稲富栄次郎によってなされていたのであるが、それにはラテン語原典に基づくものではないという限界があった。鈴木訳の翻訳は稲富訳の不十分な点を補って余りあるものである。鈴木訳の特徴は、本文の厳密さはもちろんのこと、訳注が豊富で詳細なことである。小さな活字の2段組で100ページを越えるこの訳注を読み通せば、コメニウス研究上有益な多くの知見が得られるであろう。『大教授学』はさまざまな国でくりかえし翻訳されているが、種々の外国語訳にもこれほど綿密な訳注をつけているものは見当たらない。もちろん鈴木自身もアールベック（Hans Ahrbeck）のドイツ語訳の注なども参照しているのであるが、それをそのまま紹介しているのではないことは言うまでもない。また、1657年の『教授学著作全集』と1913年の『総著作集』第4巻、およびそれぞれの校訂を検討した訳者独自の「校訂照合表」を附しているところにもこの翻訳に臨む訳者の誠実な姿勢がうかがえるのである。

このように第2期において特筆すべきことは、『大教授学』の決定版ともいえる精緻な翻訳が刊行されたことにより、教育界に広くコメニウスの教育思想が理解される基盤が整えられたことである。他方で研究者の間では、コメニウスの教授学だけではなくて汎知学に焦点をあてた研究があらわれはじめたことである。この両方の面での研究の進展によって、日本のコメニウス研究は国際的なレベルに近づいたのであり、ようやくこの時期になって外国の文献にも日本の研究動向が紹介されるようになったのである。

4. 1970年から1991年まで

1958年から75年にかけて、当時のチェコスロヴァキアでは全8巻の『コメンスキー著作選集』（Vybrané Spisy Jana Amosa Komenského）が出版されたが、さらに69年からは全27巻40分冊におよぶ壮大な『コメニウス全集』（Johannis Amos Comenii Opera Omnia）の刊行が始められた。これは92年のコメニウス生誕400年までに13巻15冊が出版されている。また、コメニウスが幼年時代を過ごしたウヘルスキー・ブロード（Uherský Brod）のコメニウス博物館では1971年から国際会議の開催を始めた。そして同年から研究誌『コメニウスと歴史の研究』（*Studia Comeniana et historica*）の刊行も開始している。モラヴィア地方の民俗と歴史に

関する資料の蒐集と展示もあわせて行っているこの博物館の性格から、同誌にはそれらについての研究論文も掲載されているが、基本的にはコメニウス研究に関する論文を中心に編集されている¹¹⁾。チェコスロヴァキアを含むこの時期の研究に関しては、堀内守が「各国のコメニウス研究の動向」(『名古屋大学教育学部紀要』第16号、1970年)にまとめている。これは *Acta Comeniana* に掲載された論文を中心に分析したものである。だが、堀内の最大の功績は、やはり何と言っても『コメニウス研究』(福村出版、1970年)の公刊にある。この著作は、コメニウス研究に関して日本で最初に博士号を授与された学位論文である。彼はその「まえがき」で、コメニウス没後300年の「前年にこのような作品を書きあげたのはまったく偶然」と記しているが、この著作の刊行によって1970年は我が国のコメニウス研究にとっても記念すべき年となったのである。本書の意義は、コメニウスの汎知学と教授学の「相互透入関係あるいは、相互抱擁関係に焦点をあてることを中心的な課題として」その課題の解明に見事に成功しているところにある。日本におけるコメニウス研究において1960年前後から意識され始めた汎知学の分析は、わずか10年で一つの確固たる方法論にまとめあげられたのである。これ以後の研究は、この方法意識を前提にすすめられることになったと言っても過言ではない。

ところで、1970年に日本教育学会は、『コメニウス関係文献目録』を発行しているが、これは当時コメニウスに関する論文を発表していた数名の研究者個人の所蔵文献目録である。このような目録が発行された例は、他の学会においてもまた教育家に関しても見当たらず、唯一これのみである。このことからコメニウス関係の文献がいかに入手しにくいものであったかが推察されるのである。それだけに梅根が寄贈した「コメニウス文庫」の持つ重要な意義をいっそう深く理解することができるであろう。

さてこの堀内の研究は、当時大学院生であった若手研究者にも大きな導きの星となり、70年以降80年代にかけて従来よりも若い層が続々と論文を発表していった。1970年から91年までの第3期には、実に172の文献が公刊されている。かつて77年に筆者が「コメニウス関係日本語文献目録」を日本教育学会の『教育学研究』第44巻第3号に発表した際に収録した文献は、明治以降の文献を含めてわずかに100編余りを数えるのみであった。そのことを思えば、この第3期はコメニウス研究が日本の教育界に定着し、一つの位置を占めることができた時期と見ることができよう。コメニウスの著作の翻訳も『母親学校の指針』(Informatorium maternum, 1633年執筆および出版、藤田輝夫訳、玉川大学出版部、1986年)、『世界図絵』(井ノ口淳三訳、ミネルヴァ書房、1988年)と相次いで行われ、学生や教師も従来名前のみを知るだけであった著作を直接手に取って読むことができるようになったのである。

他方でこれまであまり取り上げられる機会のなかったコメニウスの著作を分析した論文が次々に発表されたことも、この第3期の特徴としてあげることができる。たとえば、藤田輝夫は『ラテン語学習についての教授学論究』(De sermonis Latini studio didactica dissertatio, 1637年執筆、1638年出版)を手がかりとし、貴島正秋は『天への手紙』(Listové do nebe, 1616～17

年執筆，1619年出版），『安心の中心』（Centrum securitatis，1622年～25年頃執筆と推定されている，1633年出版），『唯一の必要事』（Unum necessarium，1667～68年執筆，1668年出版）などを考察の対象としたが，これらはその後もほとんど言及されることのない著作である。同様に太田光一も，『汎覚醒』（Panegersia，1647～55年執筆，1656年出版），『汎啓明』（Panaugia，1645～60年執筆，1656年出版），『汎知』（Pansophia，1650年前後に執筆，1966年出版），『光の道』（Via lucis，1641～42年執筆，1668年出版）などを分析した。さらに佐藤令子も『汎教育』（Pampaedia，1650～55年執筆，1960年出版）を中心にして，コメニウスの生涯教育の構想に焦点をあてた一連の論文を発表していた。

また，吉岡良昌がコメニウス教育学の神学的前提について論じ，藤原幸男がコメニウスの道德教育論に関する論文を発表するなど，従来意外に論じられることのなかった側面についての研究がすすめられたのもこの時期の特徴であろう。さらに秋葉美也子はコメニウスの幼児教育論，高橋勉も視聴覚教育論に関して継続的に論文を発表した。そしてこのようにコメニウスに関する論文を発表してきた研究者の間で，1992年のコメニウス生誕400年をいかに迎えるかが共通の大きな関心事となっていたのである。

5. 1992年前後から今日に至るまで

第4期に関する記述を1992年から始めるのは穏当ではあるけれども，厳密に言うとは適切さを欠くことになるかも知れない。なぜならば，生誕400年を記念する種々の準備はすでにそれ以前からすすめられていたし，それらの下地が用意されて92年の開花へと導かれたと見るのがむしろ妥当だからである。このことは日本にも世界にも共通にあてはまるであろう。たとえば，貴島正秋は92年に「コメニウス教育学—祖国解放の父としてのコメニウス—」を『芦屋大学論叢別冊』に発表した，これは第3期に26編と最も多くの論文を発表してコメニウス研究に寄与してきた内容をいわば集大成したものである。彼はこの研究によって芦屋大学から博士号の学位を授与されたが，これは堀内守に続く日本で2人目の快挙であり，くしくもコメニウスの没後300年と生誕400年のそれぞれに記念すべき著作が刊行されたことになる。貴島の研究の特徴は，『民族の幸福』（Gentis Felicitas，1654年執筆，1659年出版）も含めて従来の研究においてはほとんど取り上げられることのなかったコメニウスの著作を丹念に読み解き，考察しているところにある。

92年にはもう一つ特筆すべき出版がなされた。それは藤田輝夫編『コメニウスの教育思想』（法律文化社）である。共同執筆者は，編者の藤田輝夫をはじめ，すでに第3期に論文を発表した研究者として名前を挙げた秋葉美也子，佐藤令子，井ノ口淳三，高橋 勉，藤原幸男，吉岡良昌，貴島正秋，太田光一（以上執筆順）などである。この他前之園幸一郎がルネッサンスの百科思想という専門の立場からコメニウスを論じてこれに加わった。さらにこの年名古屋大学を定年

退官することになった江藤恭二も序章を執筆して後続の研究者を励ました。ドイツのコルトハーゼ (Werner Korthaase) は、自らも編集に参加した『コメニウスと現代』と題する著作において、日本におけるコメニウス研究の動向を6ページにわたって論じているが、その中でこの『コメニウスの教育思想』の執筆者全員の氏名と各章の題名を表紙の写真も添えて紹介している¹²⁾。そこでも指摘されていることだが、この著作がコメニウスの教育思想のみならず、哲学、神学、平和思想などの側面についても論じているところに、日本におけるコメニウス研究の広がりや深まりを見ることができるのである。

この著作は、92年3月にプラハで開催された国際会議にあわせて出版されたが、もちろん駆け込み的に編集されたものではない。ここでその経緯を記すと長くなるが、必要な範囲でたどることにしたい。この間の共同研究の一連の動向については、上記の共同執筆者の一部が助成を受けた『科学研究費補助金研究成果報告書』に、代表の太田光一が簡潔に整理しているので、まずそれを紹介する¹³⁾。

太田の記すところによれば、「太田のところへ井ノ口が研究交流の手紙を送るようになったのが1979年頃から、また藤田が論文や資料を送って来るようになったのが1984年頃からであった」とされる。そしてこの3人は、「1987年8月の日本教育学会第46回大会（大東文化大学）の『自由な集会』の場にコメニウスに関心をもつ人々が集まろうと呼びかけた。藤田を中心にして進められたその時の会合に佐藤や貴島を含め11名が参加し」「以後毎年教育学会の開催に合わせて交流集会を継続することを確認した。この時、1992年のコメニウス生誕400年を期して何らかの共同研究を組織しようという希望も出された。」そして「それは三つの形で実現した」と太田は記している。その一つが『コメニウスの教育思想』の出版であり、今一つが科学研究費の助成による2年間の共同研究である。さらに三つ目は『日本のコメニウス』と題する研究誌の発行である。この編集を佐藤と井ノ口が担当することになり、91年の創刊号以来その後も毎年定期的に発行されている。

また、91年と92年には日本教育学会において一つの分科会がコメニウス関係の報告で占められ、多くの参加者が討論に参加するという場面も見られたし、92年の教育史学会第36回大会でもコメニウス研究に関するコロキウムが持たれた。他にも生誕400年を記念して東京や名古屋でさまざまな集会が開催され、いろいろな機会に多くの研究発表がなされたが、それらはいずれもかなり以前からの準備期間を経たものであることが、太田の報告からもうかがえるのである。本節のはじめに「第4期に関する記述を1992年から始めるのは穏当ではあるけれども、厳密に言うとう適切さを欠くことになるかも知れない」と記した所以である。

第4期の記述を時期区分通りに始めるのではなく、1980年代後半の動向と関連して見ていく必要のあることを補足したが、この時期の特徴は、コメニウスに関心を抱く研究者の増加であり、かつ彼らが互いに連絡を取りながら研究をすすめていることである。その中でもひととき高い峰に立っているのが藤田輝夫であることは、衆目の一致して認めるところである。藤田は、1987

年以降日本教育学会の年次大会においてそのプログラムの一部として開催されているコメニウス研究の集いの呼びかけ人となり、自ら翻訳したコメニウスの著作を毎回すべての参加者に配付している。彼のこの一貫した誠実で継続的な努力によって、近年私たちはコメニウスの主要な著作はもとより、英語やドイツ語に翻訳されていない文献でもラテン語やチェコ語の原典からの翻訳で読むことができるようになったのである。このことは今後新たにコメニウス研究に着手しようとする若い研究者にとって大きな励ましとなるであろう。筆者は本稿の最初に世界の研究動向を見渡して、「コメニウス研究の盛んな国はチェコとドイツである。この二つの国からは相当の隔りがあるけれども、その次に位置するのはイギリス、そして日本ではないだろうか」と記したが、それは原典からの翻訳を自国語で読めるという有利な条件が備わっていることも考慮した上でのことである。資料や研究成果を進んで公開し、それらを共有することによって研究の裾野を広げ、さらにそれが全体の研究水準を高めることにもつながるという考えは、コメニウス自身の理念にもかなったものであり、同じくコメニウス研究を志す者の1人として常に念頭に置いておきたいものである。藤田はまた国内で中心的に活動しているのみならず、堀内と並んで海外でもよく知られた研究者である。プラハで開催された生誕400年の国際会議には実行委員として活躍し、チェコ語で執筆した彼の報告が参加者の大きな関心を集めたことは記憶に新しい¹⁴⁾。

第1期の梅根、第2期の鈴木および江藤、第3期の堀内に続き、第4期においては藤田が日本のコメニウス研究をリードしていることは疑いのないところであるが、第4期の特徴は1人傑出した研究者が存在するという言わば「富士山型」ではなくて、どちらかと言えば「八ヶ岳型」に近い様相を呈していることである。このことを「どんぐりの背比べ」的に受けとめる向きもあるかも知れない。しかし、関係する者の1人としてはいささか発言しにくいのであるけれども、これは決して悪いことではないように思われる。コメニウスのように劇的な人生を送り、膨大な著作を残した人物について、彼の生涯と著作およびその意義に関して研究する場合、個々の努力に委ねられるだけでは相当の時間を費やすことが求められる。したがって、もし共同・協力の体制が確立されれば、それはきわめて有利な条件となるであろう。チェコやドイツで研究がすすんでいるのもこのような体制がすでに生まれ、軌道に乗っていることと無関係ではない。そして日本においてもその素地はすでに形成されつつある。ここに日本のコメニウス研究の今後の発展の可能性を見ることができるのである。

6. 今後の課題と展望

さて、これまで時代の古い順にそれぞれの時期の特徴について素描してきたが、最後にそれらを総括的に検討し、世界の研究動向と比較した場合の日本のコメニウス研究の課題および今後の展望について述べることにしたい。

明治期にコメニウスの名前が伝えられて以来日本のコメニウス研究は一貫して教育学者が中心

的に担ってきた。これは一見当然のようではあるが、世界の動向からすると偏りのあることは否めないところである。たとえばイギリスではシェフィールド大学のグリーングラス (Mark Greengrass) 博士がコメニウスに関する論文を継続的に発表しているが、彼の専門は16世紀のフランス史なのである。日本では最近でこそさまざまな文献に言及されるようになってきたが、『大教授学』のみを繙いて論文を書くという状態が長らく続いてきた。つまり、もっぱら『大教授学』を中心にしたコメニウスの教育論に関する研究が行われてきたということが、まず第1の特徴である。したがって、その蓄積を生かして彼の汎知学系列の著作の研究と複合させることがこれからの課題となる。文献としては、晩年の大作である『人間に関する事柄の改善についての人類あての総勧告、なかんずく、ヨーロッパの有識者・聖職者・支配者にあてて』(De rerum humanarum emendatione consultatio catholica ad genus humanum, ante alios vero ad eruditos, religiosos, patentes Europae. 1645～60年頃執筆, 1966年出版, 以下『総勧告』と略称する)の研究が必要であろう。20世紀になって偶然の機会に発見されたこの著作は、執筆以来300年後の1966年によりやく全7部が刊行されたのである。10年前に太田光一は、日本の『総勧告』研究の状況を概括し、「『総勧告』を対象にした研究の固有の分野はまだ未開拓のまま残っていると見えよう」と記したが¹⁵⁾、その後の太田の一連の研究成果を認めるとしても、彼自身の述べた状況は今日もなお大きく変化することなく続いている。この大作の分析にはやはりチェコにおいて行われているような共同研究体制をとって進めていくことが必要であるように思われる。そして今ならそれが可能なのではないだろうか。

というのは、チェコにおいてもドイツにおいても研究者層がしだいに高齢化しつつあるのだが、日本においては相馬伸一、佐久間(運天)エリザ、大川洋など20歳代から30歳代前半の若い研究者が着実に研究成果を挙げつつあるからである。これからはコメニウスのような古典研究に携わる場合にも、パソコンを活用することによって文献を検索したり、原典に使用されている語彙の特徴を分析したり、研究情報の交換を瞬時に رفتりするという効果をもたらすことが期待されるが、この意味でも若い層の登場は頼もしいことである。また、これまで日本ではラテン語やチェコ語の原典を読む研究者は限られていたが、最近ではチェコ語の学習環境も数年前に比べると飛躍的に整いつつある。秋葉のように3年間もチェコのカレル大学で学ぶ若い研究者もあらわれてきた。これらのことから共同研究の成立する可能性が存在すると思われる。

ところで1992年以後、チェコでは従来見られた社会改革者としてのコメニウス像だけではなく、哲学者あるいは宗教者としての業績を再評価する動きもあり、研究課題も多様化する傾向にある。他方で、*Acta Comeniana* や *Studia Comeniana et historica* などの定期刊行物の発行が遅れ気味であり、全集の出版も中断したままである¹⁶⁾。これは研究の停滞というよりも主として財政難によるものである。かつてチェコスロヴァキアにおいてコメニウス研究を中心的に担ってきたコメニウス研究所も整理され、主なスタッフは科学アカデミー哲学研究所に配置換えとなったが、その際規模が相当縮小されている。現在は言わば少数精鋭体制であり、個々の研究者の負

担は確かに増えている。1989年のいわゆる「ビロード革命」以後の市場経済導入に伴い、売れ行きの芳しくない専門書の出版は、分野を問わず困難に陥っているのである。そこでパソコンを駆使して版下まで作成し、今後は哲学研究所の自費出版の形で研究誌や全集の刊行が計画されているほどである。

財政難から研究に支障をきたしている例はほかにもある。コメニウスと親交のあったハートリブ (Samuel Hartlib, 出生年不明～1662) の書簡類をシェフィールド大学のプロジェクト・チームが長年かかってCD-ROMに収めることに成功し、現在これを市販している。これは研究上まことに有益なものであるが、その価格が大統領の月給を上回るほどの高さであるためにチェコではそれを購入することができないのである。日本の研究者がこれを活用していると聞いて彼らがうらやましがめるのも無理はない。一般に研究費が豊富にあれば研究が進むというものではないにせよ、不足すればたちまち困難に陥ることは明らかである。この点ではどの国でも苦慮しており、特にそれは出版活動の面で顕著にあらわれている。日本ではコメニウスの伝記が未だに出版されていないが、ある出版社から広告まで出されていたクラトフビル (Miroš V. Kratochvíl) の翻訳出版が、完成原稿が受理された後になって出版社の経営難を理由に白紙に戻されるという事態も生じている¹⁷⁾。また、現在ドイツで全12巻のコメニウス全集の刊行が企画されているが、もっとも困難なのはこれを引き受けてくれる出版社を探すことなのである。

最後に日本のコメニウス研究の課題を二つ指摘しておきたい。一つは、訳語の統一と定着をはかることであり、いま一つは研究成果の報告を外国語で行うことである。つまり現状では受信と発信の両方に問題が存在している。

はじめに訳語のことであるが、コメニウスの著作の題名に関して誰もが共通に使用しているのは、すでに翻訳が市販されている『大教授学』、『母親学校の指針』および『世界図絵』くらいのものではないだろうか。その他の著作については、これまでことごとく複数の訳語があてられている。こうした状況に直面して、筆者はかつて次のように述べたことがある。「教育学の古典といわれる著作の中で、その表題の日本語訳が未だに定着していないものがあるとすれば、それはやはりその著作および著者の教育思想に関する研究が遅れていることの一つの反映と言わざるをえない。なぜならば、著作の内容についての研究がすすめば、そこで用いられている概念についての適切な訳語は、おのずから定着してくるはずだからである¹⁸⁾」。それから10年を経た今日においてもこのような状況は基本的に変化していない。

もっともこれに対しては、訳語が定まっていないのは何も日本だけのことではない、とする反論も予想される。たしかに英語訳やドイツ語訳にもさまざまな種類が見られるし、それがまた日本語訳に影響を与えているという側面もないわけではない。大切なことは、それぞれの訳語を採用する理由が他の人に明示されることである。先行の訳では何が不都合なのか、その説明に説得力があればその後は新しい訳語が一定の影響を持ちえよう。

訳語の問題は時間がかかるかもしれないが、いずれ落ち着くべきところに落ち着く性格のもの

である。それよりもまず先に求められることは、研究成果を外国語で発表することである。自然科学をはじめとして教育学を含む多くの専門分野では自明のことが、コメニウス研究においてはこれまで必ずしも日常的に実践されてこなかった。英語で書かれたものであれば、たとえその内容が概説的なものであっても国際的な学会誌の書評に取り上げられ、何がしかの評価を受けているのが世界のコメニウス研究の現状である。日本語を理解する外国人が増加したとは言え、コメニウス研究者の中には皆無である。したがって今後は『日本のコメニウス』に収録される論文も外国語による比較的長い要旨をあわせて掲載する必要があるだろう。この意味で近年藤田、太田、佐藤、相馬らが、外国の文献を翻訳するだけでなく、チェコ語・英語・ドイツ語等の外国語で論文を発表していることは高く評価できる。思えば、*Acta Comeniana* も本文はチェコ語で書かれ、ロシア語かドイツ語の短い要旨が附されるという時代が長く続いてきた。しかし、最新の11号ではすべての論文が英語もしくはドイツ語で発表されている。チェコで開催される国際会議においても最近は英語の同時通訳がつけられるようになった。チェコ語を学ぶ日本人が増加しつつあるのに皮肉なことだが、やはりこれは歓迎すべきことであろう。

国際会議と言えば、96年はデカルト (René Descartes, 1596 ~ 1650) の生誕 400 年にあたることから、プラハとウヘルスキー・ブロトでの会議も「コメニウスとデカルト」という統一テーマが掲げられた。同時代に生きたこの2人は、かつてオランダで対話を行ったこともあり、両者を結びつけることに不自然さはない。しかし、かたや「近代教育学の祖」とうたわれ、こなた「近代哲学の創始者」と称される両雄ではあるが、近年の「ポスト・モダン」の潮流の中ではともに評判を落としている傾向にある。会議でも当然この「近代」の理解をめぐる議論がかわされた。しかし、それは参加者の主要な関心とはならなかった。なぜならば、参加者の多くが属する国においては爛熟した近代の弊害を克服することよりも、むしろいかにしてその成果に浴ずるかということの方に関心が向いているからである。

たとえばチェコでは96年秋に賃金の上昇を求める教師のストライキが頻発した。彼らの賃金は勤労者全体の平均よりもさらに低く、このままでは教職を志望する者が減少し、教師の質の低下は避けられないと危惧されている。さらに97年春にも、学校統廃合や1学級当たりの生徒数の増加に反対する大規模な集会がプラハで行われ、小雪の降る中を7,000人の教師が参加した。文部大臣や教員組合の委員長らが出席したテレビの討論番組でも、文部省の措置は教育条件を悪化させるとみる視聴者の声が75%を占めた。17世紀にコメニウスの提起した課題は、今日なお不十分にしか解決されておらず、いかにして彼の理念に学びそれを実現するかということが現実の問題となっているのである。

さて、コメニウス研究の歴史を顧みる時、第1次と第2次の世界大戦前後には重大な停滞を余儀なくされている。コメニウス自身何よりも世界の平和を終生の願いとしたのであり、現代に生きる私たちにとってもその願いを共有し、実現に向けて行動することが求められている。コメニウス研究の発展にとって最大の前提は世界の平和であり、最高の成果は研究を通しての相互理解

の深まりにある。このことを肝に命じてコメニウス研究に寄与していきたいものである。

注

- 1) ピエール・ペール, 野沢協訳『歴史批評辞典 I』法政大学出版会, 1982 年。
- 2) Werner Korthaase: Die Berliner internationale Comenius-Gesellschaft zur Pflege der Wissenschaft und Volkserziehung (1891–1934), 1993.
なお, コメニウスの死亡した年を 1670 年ではなくて 1671 年としていたところにも当時におけるコメニウスの理解がうかがわれる。
- 3) この雑誌が国際学術誌の性格を明確に打ち出して編集されるのは 1969 年以降であり, その際副題を REVUE INTERNATIONALE DES ETUDES COMENIOLOGIQUES (コメニウス研究の国際評論) と改められ, 発行号数の通しナンバーも第 1 号 (通算第 25 号) に変更された。そして 1985 年の第 6 号からは通算の号数は姿を消して 1995 年の第 11 号に至っている。
- 4) Marta Bečková: On the Development of Comenius Research in Czechoslovakia since the War, in Symposium Comenianum 1982, Uherský Brod, 1984.
- 5) 井ノ口淳三・太田光一「コメニウス関係文献目録」『コメニウスの総合的研究—生涯 400 年を記念して—』平成 4 年度科学研究費補助金 (総合研究 A) 研究成果報告書, 1993 年。
- 6) 松田友吉『最新指導文検教育科受験法』大同館, 1932 年。
- 7) コメニウス文庫については, 次の文献を参照されたい。梅根悟「コメニウス文庫について」東京教育大学図書館『図書館報』第 1 巻第 2 号, 1968 年。梅根悟「『コメニウス文庫』のこと」日本図書館協会『図書館雑誌』第 66 巻第 11 号, 1972 年。山内芳文「コメニウス生涯 400 年と『コメニウス文庫』」筑波大学付属図書館『つくばね』第 18 巻第 2 号, 1992 年。東京教育大学『コメニウス文庫蔵書目録』1961 年など。
- 8) Tatuo Morito: Address on the Occasion of Comenius Festival. *Acta Comeniana* XVIII-1, 1959. Arata Osada: Slavností Projev při Oslavě Třistého Výročí Vydání Komenského Souboru Opera Didactica Omnia na Universitě Hirošimě. *Acta Comeniana* XVIII, 1959. Eiichi Cino: Comenius Festival at Hiroshima University, April 26 1958. *Acta Comeniana* XVIII-2, 1959.
「ヨハン・アモス・コメニウス 300 年祭」は, 1958 年 4 月 26 日, 広島大学教育学部主催, 日本チェコスロバキア協会と日本教育学会の後援により行われた。
- 9) 長田新「自由解放の教育学—コメニウス教育学をどうみるか」『教育学研究』第 26 巻第 3 号, 1959 年。Arata Osada: Komenskys Wiedergeburt Pädagogik der Freiheit. *Acta Comeniana* XIX-2, 1960.
- 10) Ústav Jana Amose Komenského v Tóčku. *Acta Comeniana* XXI, 1962.
- 11) ウェルスキー・プロトのコメニウス博物館が主催する国際会議は, 1996 年までに 21 回を数え, 98 年には博物館の開館 100 周年を記念した大規模な会議が計画されている。また, 研究誌 *Studia Comeniana et historica* には科学アカデミー哲学研究所のスタッフもシュタイナー (Martin Steiner) が編集長代理を務めるほか, ベネシュ (Jiří Beneš), ウルバーネック (Vladimír Urbánek) ら数名が編集に参加している。さらにプシェロフ (Přerov) のヒーブル (František Hýbl) やドイツのコルトハーゼ (Werner Korthaase) も委員として加わり, 一地方の博物館の発行物にしては珍しくチェコ内外に視野を広げた編集方針をとっている。これは毎年 2 回刊行され, 第 54 号 (1995 年) まで出されている。
- 12) Reinhard Golz, Werner Korthaase, Erich Schäfer (hrsg.): Comenius und unsere Zeit. 1996, S. 276.
- 13) 前掲『コメニウスの総合的研究—生涯 400 年を記念して—』平成 4 年度科学研究費補助金 (総合研究

- A) 研究成果報告書, 1993 年。
- 14) FUJITA Teruo: O Výchově bez Násilí. 日本コメニウス研究会『日本のコメニウス』第2号, 1992 年。
 - 15) 太田光一「コメニウスの『総勸告』研究ノート (その1)」『高知大学教育学部研究報告』第1部第39号, 1987 年。
 - 16) *Acta Comeniana* 第11号は1995年発行と印刷されているが, 実際には96年9月に発行された。同じく95年発行とされている *Studia Comeniana et historica* 第54号は, 97年2月に発行された。また全集は, 現在9-II巻と15-IV巻の出版が準備されており, 6巻と15-V巻の編集作業も進められている。
 - 17) Miroš V. Kratochvíl: Život Jana Amose, 1975.
 - 18) 拙稿「“Orbis sensualium pictus” の日本語表題に関する覚書」『島根女子短期大学紀要』第23号, 1988 年。

本稿は, 1996 年 9 月 1 日より 1997 年 8 月 31 日までの間, 追手門学院大学長期在外研修制度の助成を受け, チェコ共和国科学アカデミー哲学研究所において行われた研修による研究成果の一部である。

1997 年 10 月 7 日 受理